

かささぎ通信 第136号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 5月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

「2024年4月の「森三郎の作品を読む会」では、「十二の桃」(『雪ごんごんお寺の柿の木』1943年12月)を読みました。

「十二の桃」は様々なおとぎ話・昔話の登場人物が交錯する話です。当日の会では、次から次へと出てくる話やその登場人物を推量し数え上げていくうちに二十以上も名前が浮かんできました。

まず登場するのは「かちかち山」の後日談です。泥舟で沈んだ狸の娘で、気立ての良い「文福おたぬ」。一方、手柄を立てたことを鼻にかけた兎は、獣仲間の憎まれ者になっていたという次第です。その「おたぬ」の隣りには「桃太郎」のおじいさんおばあさんが住んでいて、しかもおじいさんは「瘤取爺」のおじいさんの姿になっています。おばあさんが川で洗濯をしていると川上から「ドンブラコ、スッコッコ」と大きな桃の種が流れてきます。巖谷小波作の「桃太郎」の言い回しで、「桃の実」ならぬ「桃の種」と来れば次は「猿蟹」などと、作者の森三郎さんの趣向が読者にも想像がつかってきます。案の定、猿の代わりに憎まれ者の兎が来て、その桃の種と瓜の種とを取り換えようと言います。おじいさんに瓜の種をまいてもらおうと一晩で蔓が伸び瓜が実ります。瓜を二つに割ると中から親指くらいのお姫様が出て来たので、「瓜子姫子」と名づけてかわいがりしました。

一方、兎がまいた桃の種も大きな木になって十二の桃が実りました。木登りのできない兎は猿に頼むのもいやなので、「ヤシ蟹」に頼んで取つてもろおうちも考えますが、共栄園まで行かなくてはならないのでそれは無理です。ここまできると三郎さんの思いはただのおとぎ話尽くしではないなと気づきます。実は『赤い鳥』大正十三年二月号に宮原晃一郎の「椰子蟹」という話があります。また同年七月号の口絵には解説付きで写真版の「椰子蟹」を紹介しています。十二の桃のうち、一つ目の桃からは桃太郎が飛び出し、この後も「花咲か爺」「鉢かつぎ姫(鉢かづき姫)」「舌切り雀」「浦島太郎」「酒吞童子」「猿の生き胆」などにか

らめて話は展開していきます。合の手には清元の「玉菟」、わらべ歌「うさぎ」の歌が出てきます。龍宮に奪われた面向不背のしゃぼん玉を藤原淡海公(不比等)に取り返してもらおう話もあり、これは能「海士(あま)」によるのでしょうか。おじいさんは舌を切られたおたぬを舌切り狸のお宿で探し当てます。土産の軽いつづらからはお話の上手な「赤い鳥」が飛び出し、おじいさんおばあさんに毎晩面白いお話を聞かせてくれます。話の結末は鉢かつぎ姫を救い出した桃太郎と姫との結婚の宴です。瓜子姫子は鉢かつぎ姫となり、今では元服(装着)をしてかぐや姫となっています。桃太郎とかぐや姫との結婚といえは、森三郎「桃太郎の夢」(『うぐひすの謡』1933:8)で既に語られていた話です(参照「かささぎ通信」108号)。今回読んだ「十二の桃」からは桃太郎の外に、犬のこがね丸(巖谷小波、明治二十四年)、人魚姫(アンデルセン、楠山正雄訳)、兎の電報配達(北原白秋『赤い鳥』大正八年十月号)、港についた黒んぼ(小川未明『童話』大正十年六月号)、チルチルミチル(メーテルリンク、楠山正雄訳『青い鳥』)、ピーターパン(楠山正雄訳、大正十年、赤い鳥社)、ピノチヨ(コッローデイ、西村アヤ訳、大正九年)、唄を忘れたカナリヤ(西條八十『かなりあ』『赤い鳥』大正七年十一月号)、虎ちゃん(千葉省三『虎ちゃんの日記』『貞ちゃんの手紙』『トテ馬車』昭和四年)、善太と三平(坪田譲治『河童の話』『赤い鳥』昭和二年六月号からシリーズ)、山猫博士(宮沢賢治『ポラノの広場』昭和九年)が出てきます。

前作「桃太郎の夢」と同じような登場人物ですが、「十二の桃」では配給のシヤボン・合成酒・教育舞踊・軍需工場・皇軍将士・共栄園などの言葉を挿入し、国家総動員法による物資統制令などにより、人々の暮らしが日々窮屈になってきていることを示しています。三郎はこの話はお話上手の赤い鳥から聞いたのだと最後に追記して、『赤い鳥』の自由な芸術活動の時代を懐かしく思い起こしています。

〈次回予定〉2024年6月14日(金)午後一時半~三時半

「灯」(『雪ごんごんお寺の柿の木』1943:12)

「針」(『赤い鳥』1933:8)